

学融合推進センター

The Center for the Promotion of Integrated Science

CPIS

CPIS NEWS

No.15

目次

CPIS NEWS

- ・研究プロジェクト企画会議の進捗と今後
- ・UST-Sokendai Joint Seminar 開催に向けて
- ・第 10 回生命科学リトリートに参加して
- ・はじまりシンポジウム開催報告
- ・科学技術倫理と知的財産権：総研大レクチャー

CPIS Story

総研大の若手研究者が学融合推進センターに期待すること

CPIS Team

渡部鮎美 助教、見上公一 助教

CPIS Schedule

学

融合研究
事業の進
捗状況 —
公開研究

報告会、研究プロジェクト企画会議について

学融合研究事業では、総研大内の分野を跨いだ様々な共同研究の支援を行ってきました。採択された研究課題の代表者は、年に一度、公開研究報告会にて、研究の中間報告または最終報告を行うことになっており、今年は1月23日(木)、24日(金)に学融合推進センター1階ホールにて開催されました。初日の第1セッションでは、戦略的共同研究ⅠⅡの最終報告3件、続いて中間報告9件(5分間ずつのプ

レビューとポスターセッション45分間)の発表が行われ、総勢50名を超える参加者が集まり、活発な議論がなされ、その後の懇親会も大盛況でした。ポスター発表には、研究費の増額の特典があるポスター賞が設定されており、参加した全ての教員による投票(各自シール2枚を貼る方式)で決定されます。今年度のポスター賞は、比較文化学専攻の菊澤律子准教授の

「手話言語学を世界へつなぐ—メディア発信とe-learning開発に向けて—」、および地域文化学専攻の野林厚志教授の「料理」の環境文化史：生態資源の選択、収奪、消費の過程が環境に与えるインパクト」の2つの課題が同点1位でポスター賞(学融合推進センター賞)に選ばれました。この2課題には、特典として次年度の研究費に25万円が加算されます。2日目の第2セッションでは、公募型共同研究

と若手研究者研究支援の最終報告



公開研究報告会の様子

6件の発表が行われ、続いて研究プロジェクト企画会議の活動報告と全体討論が行われました。この企画会議というのは、総研大を代表するような比較的大型の融合研究プロジェクトの創出を目指し、その在り方や今後の展開に関する議論を行う会議です。各回ごとに様々な専攻から3~4名の話題提供者を招いて議論を重ね、すでに4回ほど開催されてきました。今年度は残り1回、**第5回企画会議を3月14日(金)午後**に国立遺伝

学研究所で開催する予定になっています。融合研究は本当に必要なのか？どのようにすれば融合できるのか？これまでも同じ議論が繰り返されてきましたが、今回はいくつか新しい視点がありました。①融合研究にも階層性がある；非常に近い分野同士の融合から文系と理系といった遠いもの同士の融合の体系があり、それらを区別して扱う必要があるのでは？②箱物を作って無理やり「融合」させてもダメ、研究文化やスタイル、価値観、評価方法等が元々異なる者同士ではコミュニケーションが成り立たないので、喧嘩を通してようやく歩み寄りが可能になってくる、それには時間が必要（欧米での成功例）③これまでの企画会議や「はじまり」シンポジウムなどを通して、アイデアが乱立してきている状態なので、「もの」と「こと」の大きく2つに整理してみてもどうか（高畑学長）。これらの貴重なご意見を踏まえて、次回以降も継続的な議論を重ねていく所存です。

また、去る1月17日（金）には、研究プロジェクト企画会議ワークショップの初の試みとして「フーリエ変換によるイメージングとその周辺領域」が学術総合センターで開催されました（話題提供者6名；電波干渉計によるブラックホールの可視化の試み、スパース性に基づく情報処理、タンパク質 X 線結晶構造解析、電子顕微鏡による位相コントラストの形成など、欠けている情報をいかに復元していくかという共通コンセプトを様々な分野での実例として覗くこ

とができ、大変有意義でした）。これは、企画会議の議論の中から湧き上がった連携研究の芽となりうる提案に対し、その実現を目指してより具体的な議論の場としてワークショップを開催する、ということが趣旨となっています。発起人である本間希樹先生（天文学専攻）によると、全学事業担当者会議の終了後の「日本酒で学融合」（2013年7月1日）に参加し、その時のインフォーマルで自由な雰囲気で行われた議論が、最初のきっかけだそうです。今後はこのようなタイプのワークショップが続々と創出されることを期待しています。また、戦略的共同研究の各プロジェクトごとの学内公開セミナーがいくつか開かれる予定ですので、ここまでこの文をお読みになっている皆様に、それらの機会も有効にご活用いただき、新しい知り合いを増やして、研究交流、共同研究への「きっかけ」としていただければ幸いです。

研究プロジェクト企画会議ワークショップ「フーリエ変換によるイメージングとその周辺領域」2014年1月17日（金）学術総合センター

天文学専攻 本間希樹 准教授「電波干渉計によるイメージングとその解析」

統計科学専攻 池田思朗 准教授「新たな情報処理の流れ：スパース性に基づく方法」

物質構造科学専攻 千田俊哉 教授「タンパク質 X 線結晶構造解析における画像処理」

情報学専攻 速水 謙 教授「(劣決定)逆問題の解法と薬物動態への応用」

情報学専攻 小野順貴 准教授「拡散雑音モデルベース主成分分析によるマイクロフォンアレイ信号の次元削減」

生理科学専攻 村田和義 准教授「電子顕微鏡による分子から細胞までの構造解析」

第1回企画会議の話題提供者（2013年7月25日（木）学術総合センター）

極域科学専攻 工藤 栄 准教授「南極湖沼から生態系の原理を探る」

比較文化学専攻 菊澤律子 准教授「言語をとおしてみる人間研究」

生理科学専攻 小松英彦 教授「質感を科学するということ」

第2回企画会議の話題提供者（2013年9月14日（土）都内会議室）

生理科学専攻 池田一裕 教授「次世代バイオサイエンス推進のための研究・教育拠点」

素粒子原子核専攻 板倉数記 講師「『極限状態』から紐解く自然現象の謎：学際的・多角的アプローチの可能性」

基礎生物学専攻 亀井保博 准教授「光学解析技術による新しい挑戦」

第3回企画会議の話題提供者（2013年10月2日（水）岡崎山手地区）

生命共生体進化学専攻 長谷川真理子 教授「惑星科学と生命科学の融合：生命概念の普遍化をめざして」

構造分子科学専攻 正岡重行 准教授「人工光合成を志向した金属錯体化学」

核融合科学専攻 岡村昇一 教授「核融合研究の現状と基礎研究との関わり」

基礎生物学専攻 玉田洋介 助教「補償光学顕微鏡プロジェクトの経緯」

第4回企画会議の話題提供者（2013年11月5/6日（火/水）国立民族学博物館）

地域文化学専攻 池谷和信 教授「豚の遊牧から家畜化を考える」

比較文化学専攻 關 雄二 教授「ペルー北高知バコパンバ遺跡における先祖崇拝と星座」

基礎生物学専攻 新村 毅 助教「動物の言葉の意味を探る」

地域文化学専攻 竹沢尚一郎 教授「博物館の歴史と民俗学博物館の課題」

第5回企画会議（2014年3月14日（金）国立遺伝学研究所）

話題提供者：遺伝学専攻 小林武彦 教授

ほか数名

（文責 田辺 秀之）

U

ST-Sokendai Joint Seminar on Computa- tional Sciences

本年 7 月 29 日(火)より 8 月 1 日(金)の 4 日間、韓国テジョン(Daejeon (大田))において、本学と韓国 UST (University of Science and Technology (科学技術聯合大学院大学))との間で、2014 UST-Sokendai Joint Seminar on Computational Sciences のタイトルのジョイントセミナーが実施されます。タイトルにあるようにセミナーの主題は計算科学です。現在、計算科学は、天文科学、分子科学、核融合科学、高エネルギー科学、生命科学などの広い分野を横断する基礎科学として、ますます、その重要性を増しつつあります。したがって、このセミナーでは、広

い分野の学生諸君に参加を募り、計算科学の基礎と分野を超えた計算科学の広い活用性について学ぶ機会を提供します。

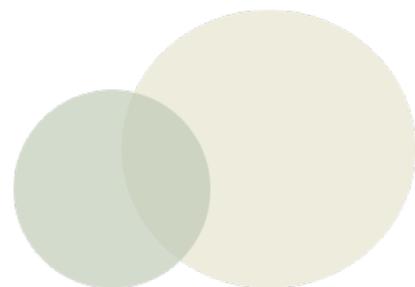
UST は、本学と同じように国立研究機関を基盤とする大学院大学ですので、その設立当初から本学と友好関係にあり、双方の合意によって、天文科学専攻を中心に、学生の交流事業が開始されています。2009 年 6 月には第一弾として、UST の学生 6 名が本学天文科学専攻を訪問し、同年 11 月には、本学の学生 7 名が UST を訪問しました。この UST が昨年設立 10 周年を迎え、昨年 10 月 22 日の UST 設立 10 周年記念式典では、本学の高畑学長が祝辞を述べられました。その際、高畑学長からジョイントセミナーの提案があり、実施されることになった運びです。

本学と UST は、互いに共通点の多い、国立の大学院大学であり、いずれも、世界最先端の国立研究

所において、それらの優れた人材と研究環境を基盤として、大学院博士課程教育が実施されています。したがって、このジョイントセミナーでは、その教育研究体制と理念を共有する、本学と UST との間の学術交流を深めるとともに、両大学の教育研究体制のより一層の向上を目指すことを目的としています。また、日本と韓国との大学院学生の交流を深めることにより、学生の「国際的な通用性」の向上にも寄与します。今回の第 1 回のジョイントセミナーが成功すれば、次年度以降も分野を変えて継続して行く予定です。

ジョイントセミナーの詳しい案内は、本年 4 月の入学式の際の学生セミナー、及び、総研大のホームページなどを通して、お知らせする予定です。多くの学生諸君の参加をお待ちします。

(文責：桑島 邦博)



UST スタッフとジョイントセミナーの打ち合わせをされる高畑学長
(左より 3 人目、2013 年 10 月 22 日)

生

命科学リトリートに参加して

10 月 30-31 日に静岡県掛川市のヤマハリゾートつま恋にて、第 10 回生命科学リトリートが開催されました。生命科学リトリートとは、生命系の 4 専攻(基礎生物学専攻、遺伝学専攻、生理学専攻、生命共生体進化学専攻)の学生と教員が一同に会し、研究発表を通じて交流を図る会で、学融合推進センターの教育事業経費による支援の公募型教育事業のひとつです。

参加する全ての学生は、1 分間のショートスピーチとポスター発表を英語で行います。その他、第一線で活躍されている 3 名の研究者

による招待講演など盛りだくさんの内容となっております。参加者も 140 名を超える、総研大の中でも規模の大きいイベントです。驚いたことに、それらのオーガナイズは委員の学生が中心となっております。参加する学生の中には留学生も多く、事務連絡を行うことひとつをとっても、大変な苦労がうかがえます。主たる学生委員は、4 専攻の中から持ち回り制で担当が決まりますが、毎年の委員ごとの独自のアイデアをリトリートの中に盛り込んでいます。今年そのひとつが、「いいね賞」です。「いいね賞」とは、学生にシールを配り、自分がいいと思った研究発表に対し、そのシールを貼ります。発表者のモチベーションアップにもつながり、参加者も盛り上がる大変良い企画だと思

ました。

今回、生命科学リトリートに私は初めて参加させていただきましたが、泊りがけで寝食を共にしてディスカッションを行うことで、教員にとっても他専攻の先生方と交流を深められる大変良い機会であると感じました。まだ参加されることがない方は、来年度はぜひ参加してみてください。

生命科学リトリートの様子は学融合推進センターホームページの下記のページでご覧いただけます。学生委員長の養老さん(基礎生物学専攻)のインタビューや「いいね賞」受賞者のメッセージもありますので、ぜひご覧ください。

http://cpis.soken.ac.jp/htdocs/?page_id=301

(文責 塚原 直樹)



は

じまり
シンポ
ジウム

～「はじまり」という 学際研究～

総研大は25年前に国立大学として始まりました。大学としての理念は、新しい分野の創出、研究の総合化でした。

25年を経て、総研大のこれまでの取り組みを総括するようなシンポジウムが開催されました。その名も、ずばり「はじまりシンポジウム」です。2013年11月25日、26日にかけて、葉山キャンパスで、「はじまり」をテーマにした学際的シンポジウムが開かれました。

皆さんは子供の頃、この宇宙はどうやって始まったのか、地球の生命はどう生まれたのか、そして人間はどうして今のような文明を築くようになったのか、を考えた

ことはありませんか？そのような単純な問いの謎を解くことは、研究者ならご存知でしょうが、一番難解です。

というのも、起源には必ず要因がありますが、その要因に迫るにはたくさんの仮説が考えられるからです。例えば、地球の生命の起源一つをとっても、生命の種は地球から生まれたのか、宇宙から降り注いだのか、複数の可能性が考えられます。その可能性を真説にしていくためには、天文学から物理学、生物学まで様々な知恵を集め、検証していかなければなりません。

そのため、素朴な謎ほど学際的検証が必要不可欠なのです。本シンポジウムにおいても、家畜の起源を探る研究をされている、地域文化学専攻の池谷和信先生は、講演中「文系は理系の力を必要としています！」とその場で叫ばれました。どうして人類は家畜化に成功したのか、遡れない歴史のスタートポイントを探るためには、文化人類学的考察はもちろんのこと、

遺伝学的、地学的観点からの考察も必要だと池谷先生は説明されました。

学問が細分化する半面、研究者には複雑で他分野にまたがる大きな課題に対して対峙することが求められています。人類の謎、人類の課題に取り組むためには、学問の垣根を超え、多方面からの学際的アプローチが求められている、はじまりシンポジウムにおける講演の中ではたびたびそのような学際的研究の必要性が訴えられました。

学融合推進センターとしても、今後、総研大の学際ネットワークの構築を通して、恒久的課題に取り組む総研大研究を支援していきたいと考えています。



(文責 奥本 素子)

科

技術倫理
と知的財
産権

メディア社会文化専攻の児玉晴男教授の総研大レクチャー「科学技術倫理と知的財産権」が、12月16-18日に基礎編として、1月16-18日に応用編として、2回にわたって放送大学にて実施されました。応用編では、加藤浩教授（日本大学

大学院知的財産研究科）、土屋俊教授（大学評価・学位授与機構）、隅蔵康一研究官統括主任研究官（文部科学省科学技術政策研究所）の3名の外部講師による講義も組み立てられており、中身の濃い、豪華な内容となっております。

科学論文を発表する上で、倫理や権利は切っても切れないものです。また、研究を進める上で、活用する上で、倫理と権利は複雑に絡み合っています。問題が生じた際に、それは倫理的な問

題であるか、権利の侵害に関わる問題であるかなど、整理して考える必要が出てきます。複雑に絡み合う倫理と権利を整理し、理解する力がなければ、思わぬ落とし穴に落ち、研究者生命を絶たれる危険もあるわけです。この総研大レクチャーでは、研究を進める上で関係する倫理と権利を整理して理解するとともに、実例をもとに、問題点を参加者間でディスカッションをして、今後の研究に生かすことができるセミナーです。

今回の参加者は少数であったこともあり、対話式で進められたため、参加者が疑問に思ったことはその場ですぐに質問し、講師の先生方にお答えいただく形式で講義は進められました。講義終了後に学生に感想を聞くと、疑問がすぐに解消され、また、専門家との深いディスカッションができたことが良かった、との声がありました。

ディスカッションの中では、学生から「著作権は研究を自由に進める上では障害でしかないから、

著作権なんて存在しない方が良い」などの意見も出るなど、議論も白熱しており、参加した私の感想として、素直に面白いと感じる講義でした。最後の総合討論の中であった、「特許権の取得は、企業との共同開発、製品化を促し、研究の社会還元に結びつく」というお話は、私が過去に身をもって体験したことでもあり、改めて、知的財産権の重要性を感じました。学生だけでなく、教員にとっても重要な講義内容となっておりますので、

ご興味のある方は、次年度の講義をぜひ受講してください（教員が受講する場合は事前にお問い合わせください）。



（文責 塚原 直樹）

CPIIS Story

総

研大の
若手研
究者が
学融合推進センター
に期待すること

今回は比較文化学専攻の菊澤律子先生と基礎生物学専攻の玉田洋介先生にアンケートとインタビューを行い、学融合推進センターの事業に関するご意見を頂戴しました。



菊澤律子准教授(比較文化学専攻)

Q. 学融合研究公募事業に関するご意見、ご提案（応募件数が少ない現状がある）

A. 各専攻の専攻長や専攻委員の先生方からの紹介を積極的に行っていただいた方が良い。

総研大内外の研究者が合わさ

ったチームでよいということは、公募の段階で大きく謳っても良い。

事業計画として完成したものを求めるのではなく、プロジェクトとして起ち上げるための支援をする、という性格の公募があっても良い。

現在出ている様々な研究費は、新しいものを作る場合には申請しやすいが、継続することやメンテナンスに必要な資金の申請は難しいので、それらをフォローする枠があると良い。

トップダウンとボトムアップの双方による学融合推進が不可欠。

Q. 教育公募事業に関するご意見、ご提案（応募件数が少ない現状がある）

A. 若手にとって、研究成果と比較して教育歴がプロモーションに結びついていない現状では、研究事業と比較して応募するモチベーションが著しく低くなるのは仕方ないかもしれない。

各事業の趣旨が分かりにくい。具体例を挙げるなど、ホームページ等の見せ方を工夫した方が良い。

実際の学生の教育はポスドクや技術職員が行っている例が多く、何らかの形で参画してもらえるような枠組みがあった方が良い。

Q. 過去の共同研究のきっかけ

A. 必要な技術を求めていたことがきっかけで、共同研究がスタートした。また、機構における分野間連携を支援する公募が共同研究を後押しした。

具体的に探求したい研究テーマがあり、それに対して学術的な必要が生じたときに共同研究という形に発展している。

Q. 過去の共同研究で苦労した点

A. お互いの知識やバックグラウンドが異なるため、ディスカッションの際には言葉の定義のすり合わせから行わなくてはならない。

関わる人数が多く、研究テーマがピンポイントで想定されていないときには、こちらからどのような情報提供してよいのか分からず困ることがある。

Q. 共同研究を行う上で、これまで受けた支援で良かった点、悪かった点

A. 事業資金の援助はどんなケースであれ助かる。

科研費に応募できないような極めて萌芽的な研究を積極的に支援するプロジェクトの存在は、共同研究には不可欠で、その意味では、学融合推進センターの研究事業も非常に良い。

過去に、最終的な申請の前に、審査員からの意見を聞き、修正することができる公募に応募したことがあったが、最終的な申請書は当初とは大きく異なる内容になったが、質が向上した。

総研大の事務方からは、必要書類や、書類の扱い等について、迅速でかつ的確なアドバイスをいただくことができ、いろいろなことがスムーズに勧められてありがたい。他機関のプロジェクトでは全く逆のケースがあり、何をやっても事務書類が滞るため事業全体が破綻しかけたことがある。

Q. 共同研究を行う上でどのような支援が必要か

A. 科研費に応募できないような極めて萌芽的な研究を積極的に支援するプロジェクトがあった方が良い。

共同研究の種を掘り起こすには、学際交流のイベントを大々的に開催した方が良い。

現在行っているような様々なシンポジウムとその参加費用の支給は非常に良い。ただし、現在の広報の仕方だと、あくまで

いろいろな分野の人が集まって話しているというだけの印象を与えるので、学際的な取り組みをすることで何が明らかになったのかをもっとアピールすると良い。

Q. 学際研究の創出を目的とした交流会を開催することについて

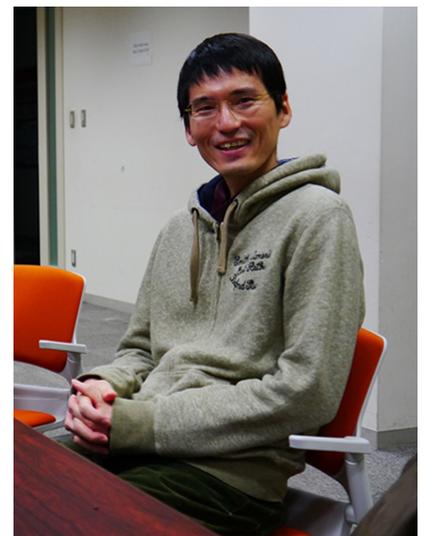
A. 学融合研究の推進のためには、ネットワーク作りは不可欠。興味のある人は参加できるような場があれば良い。

趣旨を理解している企画会議の参加者に、自分の所属する専攻の中で適している人物に声をかけてもらった方が良い。

学融合研究事業の公募の 1 か月前などに、説明会を行ってはどうか。

Q. ホームページについて

A. デザインがもっとおしゃれになった方が良い。キャッチーさが必要。



玉田洋介助教（基礎生物学専攻）

Q. その他ご意見

A. 総研大のプロジェクトへの参加が、自分が所属する基盤機関においても評価されるような、もしくは、アピールしやすい環境であれば、より参加しやすくなる。

お二人のインタビューや企画会議等に参加されている先生方のご意見を伺うと、各事業の方向性としてはニーズにあっているようですが、広報などの周知方法が問題のひとつであることが分かります。お忙しい先生方でも参加や応募したくなるような、分かりやすい（時にはキャッチーな）広報を行うことが、学融合事業を推進するために必要なようです。

その他、ここではスペースの都合上紹介できなかったご意見

等もございますが、今後、学融合推進センター内での議論に役立てたいと思います。まだまだご意見は募集しておりますので、センター助教の塚原

(tsukahara_naoki@soken.ac.jp)

までご意見を送っていただけますと幸いです。

(文責 塚原 直樹)

CPIS Team

学融合推進センターに赴任して

渡部 鮎美

総合研究大学院大学 学融合推進センター 特任助教

2013年7月に学融合推進センター・特任助教に着任した渡部鮎美です。文化科学研究科・連携事業「学術資料マネジメント教育プログラム開発」の担当です。このプログラムは高度な学芸員養成や、保存・調査・分析といった資料ハンドリングのスペシャリスト育成を目指しています。

私自身の専攻は民俗学ですが、農業経済学、文化人類学、博物館学等の分野とも関わって研究をしています。現在は過疎・高齢化が進む農村で、人の流動性に着目し、さまざまな居住経験をもつ多様なアクターがどのような地域像をつくり出しているかについて研究しています。研究方法はフィールドワークです。学生時代から泊まり込みで地域の人びとと一緒に生活をし、農村の研究をしてきました。湯川秀樹は『目に見えないもの』（1976年、講談社）のなかで仏教的世界観を絡めて物理学を語っています。学融合的研究の上では、このように研究対象を様々な視点から深め、社会に分かりやすく伝

えていくことが大切だと思います。私自身も農村の研究を進めていくうちに、農業技術から高齢者福祉、地域像の形成へと視点を深めていくことになりました。現在、担当しているプログラムでも学生が様々な視点から研究を深められるように努めていきたいと思っています。



新潟県十日町市のウサギ猟で獲物をかかげる筆者

退職の日を迎えて

見上 公一

総合研究大学院大学 学融合推進
センター 助教

ついにこの日を迎えました。着任したのは平成 22 年 4 月 1 日のことで、この日は学融合推進センターが正式に発足した日でもあります。『科学と社会』を専門とする私にとって総研大という組織の仕組みを理解することは難しくもありましたが、どの専攻に対しても先入観を持たずに第三者的な立場から見ることができたことは良かったのではないかと考えています。

学融合推進センターという部署が明確な目的が与えられているところではなく、目的を作りながら活動しなくてはいけないところだと理解したのはつい最近のことです。私は学融合研究事業を担当し

てきましたが、最初の頃は既存の事業がうまく進むように修正を加えていくことばかりを考えていました。ある程度その基盤が整った昨年度には「学融合サロン」という活動を企画しましたがうまくいかず、その後に開催した「学融合研究事業の在り方検討会」を経て、今年度の「企画会議」に至りました。学内の研究者と実際に会って話をする中で、現場のニーズを理解し、センターとしてできる支援を考えていくという活動は地道ではありますが、全国各地にいる総研大の研究者を繋ぐためには必要なものだと改めて感じました。そして、そのような活動に対して感謝してくれる先生が多くいらっしやったことは本当に嬉しい驚きでした。

今後は英国のエジンバラ大学に場所を移して研究活動を続けていく予定です。ここで得た様々な経験をうまく活かしていければと思

いますし、どんな形になるかは分かりませんが、またいつの日か研究者として成長した自分をお見せできるようにがんばっていきたいと思います。ここまで書いてみて今の心境は退職というよりも卒業に近いのではないかとも思います。今日までお世話になった先生方、事務職員の皆様、そして本学の関係者の方々にこの場を借りてお礼申し上げます。



冬のエジンバラの街並

CPIS Schedule

総研大国際シンポジウム 「遺伝子と文化から明らかにする人類の多様性:アジア・オセアニアを中心に」 開催

【概要】生物としてのヒトと文化を持つ人間としての両側面の総合的な研究に関するシンポジ

ウムを開催します。

今回のシンポジウムでは、人間社会における「多様性」をキーワードとして、主として遺伝子と文化の面から、現生人類の地球上への拡散につれてそれぞれの多様性がどのようなパターンで変化していったのかを明らかとすることを目的としています。

本シンポジウムでは、国内外から多様な分野の著名な研究者を招いてお話を伺います。

ポスタープレゼンテーションの機会や講演者・総研大教員とのフリーディスカッションの機会もあり、充実したプログラムとなっております。また、本シンポジウムは総研大レクチャーで

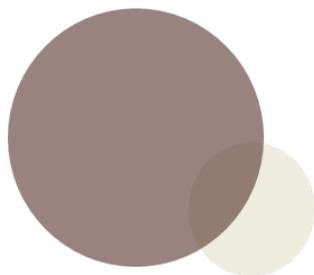
す（1 単位取得できます）。是非ご参加ください。

- ・ 実施期間:平成 26 年 2 月 3 日(月)～4 日(火)
- ・ 実施場所:本学葉山キャンパス

総研大公開シンポジウム 「人類 地球を うごく」 開催

【概要】平成 25 年度総合研究大学院大学 公開シンポジウム「人類 地球を うごく」を開催します。事前の申込みは不要ですので、ご興味のある方はぜひご参加下さい。

- ・ 実施期間:平成 26 年 2 月 8 日(土)
- ・ 実施場所:ゆうぼうと (五反田)



学内公開セミナー「科学技術コミュニケーションの実践知理解に基づくディスカッション型教育メソッドの開発」開催

【概要】本学学融合推進センターで採択の育成型共同研究プロジェクトチームによる研究会を、以下の日程にて開催いたします。本プロジェクトの今回の第 1 回公開セミナーでは、科学教育と

科学政策に関する研究をされている先生方をお招きし、講演いただき、科学技術コミュニケーションをめぐる諸問題を議論します。総研大院生や教職員の方々にも、是非議論にご参加いただければと思います。

- ・ 実施期間:平成26年2月26日(水)
- ・ 実施場所:日本科学未来館

学内公開セミナー「強い磁場がもたらす新しい現象」開催

【概要】学融合プロジェクト「自然界の様々なスケールに現れる高エネルギージェット現象の解明」では、素粒子の微細なスケールから宇宙における巨大なスケールに現れる様々な高エネルギージェット現象についての分野横断的な研究を行うが、ジェット現象を理解するの一つの手掛かりとなるのが「強い磁場」の存在です。宇宙においてはブラックホールや中性子星などにおける極限的な現象や素粒子の超高エネルギー反応で生成する磁場は、地球上で人類が作り出せる磁場の最強強度の 8 ケタから 13 ケタも強いものになることが分かっています。そのような強い磁場の下では通常見られない興味深い現象が起こることは容易に想像できるでしょう。本公開セミナーでは、この「強い磁場」がもたらす新しい現象を分かりやすく紹介し、その現象の持つ魅力を概観します。

- ・ 実施期間:平成26年2月26日(水)
- ・ 実施場所:高エネルギー加速器研究機構つくばキャンパス

大学院教育研究会「研究と生活の調和を目指して～ワタクシ的なことと研究のこと～」開催

【概要】本研究会は、大学院生が研究を続けていくうえで対面するであろう、生活と仕事の調和（ワークライフバランス）について、講演とディスカッションを通して本課題について考える場です。具体的には、現在子育てしながら、勉学・研究・仕事に取り組んでいる若手研究者に体験談を講演してもらうとともに、結婚や出産、子育てに伴うキャリア変遷について個別の事例をもとに参加者全員でディスカッションを行います。

- ・ 実施期間:平成 26 年 3 月 3 日(月)
- ・ 実施場所:本学葉山キャンパス

総研大研究プロジェクト 第 5 回企画会議開催

【概要】学融合推進センターでは平成 22 年度より学融合研究事業として本学における分野を超えた共同研究の支援を実施しておりますが、昨年度よりその

在り方について見直しを行っており、今年度（平成 25 年度）は複数回にわたる企画会議を開催し、様々な研究シーズの探索と議論を重ね、本学を代表する研究プロジェクトの立案を目指すこととなりました。本企画会議では、学内外の様々な研究シーズについて集中的な議論を行い、「深み」と「広がり」のある本学を代表するに相応しい研究課題を作り上げる場として開催いたします。今回はその第 5 回目の会議となります。現時点で研究プロジェクトのアイデアを持っているか否かに関わらず、本学を代表する研究プロジェクトを構築するという志を共にする本学研究者の積極的なご参加をお待ちしております。

- ・ 実施期間：平成26年3月14日（金）
- ・ 実施場所：国立遺伝学研究所

平成 25 年度 総研大学 術交流会開催

【概要】本学術交流会は、総研大教職員・在学生・修了生・名誉教授などからなるコミュニティメンバー、専攻基盤機関のさらなる連携を目指す学術交流ネットワーク（All-Sokendai Academic Network, Soken-Anet）強化に向けて、学術講演会ならびに意見交換会などを通して総研大サイエンスフロンティアについて理解を深め、学術交流の推進を図ることを目的として開催します。

- ・ 実施期間：平成 26 年 3 月 19 日（水）
～20 日（木）
- ・ 実施場所：本学葉山キャンパス

平成 26 年度 前学期学 生セミナー

【授業目的・概要】学生の広い視野の涵養を図るため、他の専攻の教員および学生との交流を持ち、自分とは異なる分野を理解する場としての授業科目「学生セミナー」を開講します。これによって新入生に対して研究者ネットワーク構築が重要であり、研究の発展に結びつくことを認識させる機会とします。

- ・ 実施期間：平成 26 年 4 月 7 日（月）
～8 日（火）
- ・ 実施場所：本学葉山キャンパス

